

## フイヒテとその時代

―入試問題を利用して歴史に踏み込ませる―

栄光学園中・高校 福本 淳

はじめに

私が勤める栄光学園中・高等学校では、世界史を三つの学年で教える。まず中三と高一の二年間、週三時間で人類出現から第二次世界大戦ごろまでを教える。高三になると地歴・公民は選択科目となり、文系の生徒は二科目、理系の生徒は一科目を自由に選択して学ぶ（文系は週四時間、理系は三時間）。高三世界史は文理どちらも一学期はやり残した現代史（おおむね冷戦終了前後まで）を詳しく教え、それが済み次第、問題演習やテーマ史に移っていく。テーマ史としては東欧史、東南アジア史など、いわゆる周辺諸国史を重視している。

また受験を控えた生徒を相手にしているだけに実践的な問題演習も何回か手がけた。大学入試の問題を選んでまず生徒に解かせ、「結構解けた」「喉まで出てきているんだけど、どうしても思い出せない」「どうやって解いたらいいのかわからない」などの感慨を抱かせ、それから答え合わせや解説に移る。ただ問題が易しい問題だと単なる答え合わせになってしまい、授業時間を使う意味もなくなってしまう。そこでハイレベルで深く考えさせるような問題をぶつけてみて、歴史学の奥深さを生徒とともに探検してみるような企画として考えたのが今回ご紹介する授業実践である。

入試問題を利用して

まず問題が良くないといけない。この点、私がこの企画を思いつくきっかけになった早稲田大学法学部二〇〇二入試の問題は素晴らしい。

▼早稲田大学法学部二〇〇二入試 第五問（一部省略してあります）

ヨーロッパにおける、中世から現代までの国家の変容について、各時代の国家の特徴に言及しながら、以下に示した語句を一度は用いて、250字以内で述べよ。

ローマ教皇 領主裁判権 絶対主義国家 「ドイツ国民に告ぐ」  
国民国家 EC

これを生徒にまず見せて十分ほど考えさせ（解くのに相当時間がかかるので最終的には宿題ということにしてその場で回答は求めない）、それから「この問題の趣旨、わかった？ヨーロッパ史における国家像の変遷ということを理解しているかどうかという問題だね」と語りかけ、それからヨーロッパ国家史の復習を主題にした穴埋め式にプリントを配布し、説明したり生徒を指して答えさせたりして空欄を埋めて行きながら穴を埋めていき、問題を解くのに必要な知識を総ざらいする。このプリントの文章作成には各社の教科書の本文をかなり参考にした。

これと並行して、ヨーロッパの国家史の転換期（中世末・市民革命期）に関して、読み物的なプリントを数枚ほど作成し、これを配布して家で呼んでくるように指示する。生徒はこうした私の説明を聴いてから最終的な答案を作成してもいいし、私の説明を聞く以前

に（自力で）解いてみていい。最終的には答案配布後1週間ほどで答えは回収し添削するが、成績的には提出したか否かだけをチェックして、答えの出来は問わない（学期成績には反映させない）。

なおこの問題は字数制限が厳しいので各時代の国家像に関して一言ずつくらいしかコメントできないわけだが、中でも難しく興味深いのは国民国家をどう説明するか、それと絡めて「ドイツ国民に告ぐ」をどう使うかだろう。国民国家の流れは、もつとも易しく表面的な説明で済ませるなら「君主が権力を握っていた時代から国民主権になったから国民国家だ」という言い方がありうるが、それだといわゆる一九世紀国民国家時代のトピックとして重要なドイツやイタリアの統一が説明できない（どちらの国も主権在民とは言いがたい）。そこでより合理的な説明として中世の遺制である身分制度や社団を排除して国家と国民が直接結びつく傾向が強まるので国民国家だという理解を生徒にぜひ伝えたい。

### ナショナリズムとフィヒテ

「ドイツ国民に告ぐ」の講演者フィヒテについて調べてみると、そもそも自我の研究で名を上げ、政治に関しては社会契約説を受け入れていたこの哲学者は、自我と他者との関係を最終的に止揚する存在を求めて悩み、またドイツで盛り上がりつつあった反仏ナショナリズムにも共鳴し、一八〇〇年ごろから、社会契約論を捨てて「絶対者」「国家の使命」への言及を増やし、個々人が積極的な意思を持って国家を支え、そうして公共心を持つことが自我にとつても究極的な救いであるという主張に達する。そのわかりやすい例が「ドイツ国民に告ぐ」だったのである。それはフィヒテの哲学の自発的・

内的発展の結果でもあるが、当時のドイツ、そしてヨーロッパがおかれた時代状況が愛国者でもあったフィヒテに強く影響している面が否めないのである。

## ★中世国家の成り立ち

フランク王国の分裂、ノルマン勢力の侵入など混乱が続いた西ヨーロッパでは、外敵に対する防衛の必要から、貴族たちは、主従関係をむすんで結束した。主君となった貴族は、臣下に領地(封土)を与えてその支配権を保護し、臣下は主君に忠誠を誓い領地の大きさに応じて軍事力を提供した。

こうした土地のやり取りを介した身分関係を\_\_\_\_\_という。国王はこの主従関係の頂点にたつものであったが、国内の土地支配権を臣下にわけ与えているため、国王の権力をささえる王領地は他の貴族に比較して相対的に大きいというだけで、王権の基盤は弱体であった。

領地は、領主が直接経営する領主直営地と農民が耕作する農民保有地、および農民が共同で利用する共同地やその他の山林・原野などによって構成され、「荘園」ともよばれた。領主は、荘園内の農民に直営地を耕作させ(賦役)、さまざまな貢納をさせた。領主はこれらを強制するため軍事力を背景に、\_\_\_\_\_を行使し、また労働力を確保するため農民の移動の自由を束縛して、農民を農奴として服属させていった。

ローマ教会はフランク王国の支援のもと各地に布教をおこない、西ヨーロッパをキリスト教化していった。各地の住民は十分の一税を教会に納めた。またこの時期、各地に建設された修道院は、神学・学問・芸術の中心として、教会の権威をささえた。こうしてローマ教会は、フランク王国分裂後の混乱する西ヨーロッパ世界で、教皇を頂点として各地の教会や修道院を従える唯一の統一的・広域的な組織として西ヨーロッパ最大の権威を形成していった。

## ★中世の終わり近代の幕開け

十字軍に参加した貴族・騎士の多くは、莫大な遠征費負担などで没落し、逆に指導者として活躍した国王の力が強くなった。十字軍の輸送や補給をになった北イタリアの諸都市は、東地中海貿易(東方貿易)を拡大し、のちのイタリア・ルネサンスの経済的基盤を形成した。また、大量の軍隊や人員の移動は、商業と交通の発展をうながした。

12世紀以降、貨幣経済が浸透し、領主と農民の関係も変化した。領主は賦役のかわりに、生産物や貨幣で地代を徴収して貨幣収入の増大につとめた。賦役の消滅は領主の農民支配の弛緩をもたらし、地代は多くの場合、固定的だったので、貨幣地代はインフレ傾向の中で農作物を換金する農民たちに有利に作用した。農民のなかには領主に解放金を支払って農奴身分から解放される者もあらわれた。さらに14世紀の黒死病の流行や戦乱による農村人口の激減は、この傾向をいっそう促進した。とくに貨幣地代が普及したイギリスでは、農業と毛織物加工業を兼ねる独立自営農民(\_\_\_\_\_)の成長が著しかった。そして社会的、経済的地位を向上させた農民は、14世紀に領主がふたたび負担を重

くしようとする、大規模な一揆によって反抗した。フランスのジャックリーの乱やイギリスの\_\_\_\_\_が典型である。

こうして、イギリスやフランスでは自給自足的な荘園制に基礎をおく地方分権的な封建制は、都市経済を中心とする広域商業に基礎をおく中央集権国家へと再編成されはじめた。

フランスのカペー朝は、12 世紀末の\_\_\_\_\_のころから都市商人の支持も得て王権が伸長し、13 世紀にはイギリス王ジョンからフランス内のイギリス領をうばい王領地も大きく拡大した。\_\_\_\_\_は、南フランスの異端アルビジョワ派を平定し王権を南へ大きく伸ばした。

\_\_\_\_\_は教皇ボニファティウス8世との争いにさいし、聖職者・貴族・平民の代表を集めて三部会をひらき(1302 年)、その支持を得てアナーニ事件をおこし、さらには教皇庁のアヴィニヨン移転を強行するなど、教皇権力を圧倒し、国王の威信を高めた。

ほぼ 16 世紀から 18 世紀にかけて、ヨーロッパでは封建社会から近代社会への移行期にあった。この時期には、農村での農民支配のうえにたった旧来の封建諸侯の勢力は衰え、都市を中心に、商工業が発展し、近代社会の基礎をなす資本主義経済の成長がみられた。しかし他方では、身分差別や封建的負担が依然として残存し、貴族・農民・大商人・手工業者などさまざまな社会階層の利害が対立していた。国王はこうした利害対立のなかで、官僚制や常備軍を整備して、中央集権的な権力を形成していった。このように国王が、諸侯の力を圧倒して「絶対的」ともいわれるほどに強い力を保持した体制を\_\_\_\_\_とよぶ。

フランスの場合、宗教改革運動の発展のなかで、ユグノー戦争とよばれる内乱が生じた。この戦乱でヴァロワ朝が断絶してブルボン家のアンリが即位し(\_\_\_\_\_)、ブルボン朝が成立した。彼は、国内統一のためカトリックに改宗したうえでナントの勅令を發布し、ユグノーに信仰の自由を認め、内乱をおさめた。ついでルイ 13 世の宰相になった\_\_\_\_\_は、大貴族をおさえ、市民勢力から抜擢した官僚を使い行政機構を整備し、また、国際的には三十年戦争に介入してハプスブルク家に対抗した。さらに、ルイ 14 世の幼少時代の宰相マザランが、1648 年におきた王権の伸長に反抗する貴族の反乱(\_\_\_\_\_)を鎮圧して、王権を強固なものとした。マザランの死後、親政をおこなったルイ 14 世のもとでは、財務総監コルベールが重商主義政策(コルベール主義)をすすめる、商工業の保護・育成と国庫の充実をはかった。ルイ 14 世は、国内の政治の安定とゆたかな財政にささえられて、たびたび外征をおこなうとともに、豪華なヴェルサイユ宮殿を中心にはなやかな宮廷政治をおこなった。

またこの時代は明確な国境線に囲まれた領土があり、その国の中央政府が自国の領土に対して外部からローマ教皇のような超国家的な権威の束縛を受けず、また国家内部でもかつての封建諸侯がそうだったような国家と競い合うような半独立の勢力もなく、自由に権力(国家主権)をふるうようになったことから\_\_\_\_\_の第一段階であるともいわれる。

1494年から1559年まで断続的に戦われたイタリア戦争は、イタリアに勢力を伸ばそうとするフランスに対してハプスブルク家(神聖ローマ皇帝であり、スペイン王も兼

任)がこれを阻止した戦いとして知られているが、有利に戦ったハプスブルクも全ヨーロッパに君臨する力量はないことを露呈し、主権国家体制の形成の大きな一里塚になった。また1648年に結ばれた\_\_\_\_\_、直接的には三十年戦争の講和条約だが、歴史上初めて主権国家を大前提とした国際条約として記念碑的意味を持つ。

---

読み物形式プリント **国家論特集** **フランス革命とは何だったのか?**

---

アンシャン＝レジームとは何であろうか?

フランスの絶対主義体制は、たしかに国王を頂点とする官僚組織を全国に張り巡らせたし、王に逆らうような行為を社会の誰にも許さなかったという意味で絶対的であった。しかしその一方で、第一、第二身分の免税特権や農村に根強く残った領主裁判権、教会や修道院が持っている古くからの特権、都市におけるギルドなど様々な特権団体が存在して、社会は非常に複雑だった。絶対王政はこのような自立的な諸団体に一定の特権を許しつつ、王を頂点とするピラミッド型の身分社会に組み込んで緩やかな結合体を作り出していたのであり、その凝縮力には限界があった。フランスでは極度の財政難でこの弱点がクローズアップされてしまったと言えるだろう。

バスティーユ牢獄襲撃と、その後におこった農民たちの反乱でフランスは騒然となった。こうした混乱状態は、裕福な人々にとって危険で許しがたい事態だったから、ミラボーやラ＝ファイエットなどの自由主義貴族や、彼らを支持する裕福な商工業者たち（ブルジョワと呼ばれる）は事態の収拾に乗り出した。彼らはまだ根強く残っていた封建的な諸制度を廃止し、国家と個人の間が存在する様々な特権団体を廃止することでフランス社会を生まれ変わらせ、混乱を沈静化させることを目指した。あらゆる人間の平等や自由、財産所有権の不可侵などをうたった人権宣言は、彼らの理想を表現したものである。しかしこの路線は意外と苦戦を強いられることになる。第一に自由主義貴族や富裕ブルジョワはフランスではまだ未成熟で勢力が弱く、単独で社会を変革できるほどの力がなかったこと、一方に依然として強い力を持っている保守派の貴族や王族、彼らを応援する諸外国の強い抵抗があり、また他方で身分制社会の中で虐げられ、貧しい生活を送っていた下層民からの、より過激で徹底した改革を求める声が大きくなってきたからだ。

このため革命の焦点は、ブルジョワを支持基盤として経済活動の自由や財産所有権の不可侵を優先するジロンド派と、更なる改革を求めて熱狂する下層民を背景に持つジャコバン派（山岳派）の対決に移っていく。外国との戦争、それが生み出す緊張感や旧体制への激しい憎悪のなかで、パリの都市下層民の力を借りてジャコバン派は政権を獲得し、力を貸してくれた下層民の要望を取り入れて普通選挙を盛り込んだ新憲法、地代の無償廃止などを実践していった。これを革命の絶頂と考えるか、本来あるべき姿からの逸脱と考えるかは、評価が分かれる。しかしそのジャコバンも政権を維持する為に独裁化し、それに対する国民の幅広い層からの反発の結果、テルミドール反動で倒された。紆余曲折をへて、最終的にフランスの実権を握ったナポレオンが定めた「ナポレオン法典」を見ると、封建

制の廃止が確認される一方で、財産権の不可侵がうたわれ、経済活動の自由が保障され、革命中に行われた教会財産の売却があらためて合法化される等、ブルジョワの要求が丸ごと実現しているのが分かる。フランス革命はブルジョワ、土地を得て保守化し始めた農民、軍部の連合により、ようやく收拾されたと見ていいだろう。そして（ナポレオンの帝政という想定外の事態もあったが）もっと長い眼で見れば、絶対主義国家を葬り、法的に平等な権利を保障された個人を単位とする新しい近代国家（これを「国民国家」と呼ぶ）の創出こそがフランス革命の意義だったと言える。

フランス革命は、それが本当はどのような現象だったかという以上に、美化された輝かしい記憶として後世に多くの影響を与えた。たしかに人権宣言がうたった「人間は生まれながらにして平等である」「それが全人類に適用されるべきだ」といった理念は、当時の世界では画期的だったし、200年以上の時をへた現在でさえ、世界中のあらゆる政権もこれらの原理を正面から否定することは出来ないという点だけを見ても、その先進性や重要性が理解される。ヨーロッパをはじめとした世界の多くの国々でフランス革命の理想は時を超えて共有され、各国、各時代の人々の行動に影響を与え続けたといえる。

フランス革命の生んだもう一つの大きな結末は、戦争のあり方の激変である。絶対主義時代の戦争は、各国の王が金で雇った傭兵からなる常備軍によって行われた。彼らはプロフェッショナルだけに武器の扱いなど技術面では熟練していたが、士気は非常に低かった。傭兵とは「体が資本」の肉体労働者である。傷つけ合い殺し合う行為に積極的であるはずはない。国王も大金をはたいて編成した常備軍を消耗させることを嫌い、決戦を極力さける傾向があった。だから絶対主義時代の軍隊は、総じて規模も小さく、じわじわと相手を追いつめて目的を達するような、例えて言うなら将棋やチェスというよりは、囲碁のような戦いをするのが普通で、決戦はどうしても必要な場合にのみ行われたし、兵士たちは時に手抜き気味に戦うことさえあった。

これに対し、1792年に登場し、ヴァルミーの戦いで勝利を飾って以後のフランス軍は全く違う。革命でせっかく確保した自分たちの権利が、外国の干渉で抹殺されそうになったとき、自分たちの革命、自分たちの祖国を守ろうと自発的に集まった軍隊である。アマチュアではあるが熱狂的な戦闘意欲があり、また数も多い。革命政府は彼らのパワーを活用するため、史上初めて本格的な一般兵役義務にもとづく強大な軍隊を編成した。革命時代のフランスの将軍たちは、金も払わなくても大量に供給され、愛国心の名のもとで自己犠牲的に、熱狂的に戦う軍隊を手にしたのだ。それゆえに敗走する敵を地の果てまで追いかけて徹底的に殲滅するといった大規模な機動戦が可能になった。ナポレオン軍の強さは彼の個人的才能ももちろんあるが、この当時のフランス兵士の戦闘意欲の高さに支えられていた面が大きい。しかしこれは悲劇の始まりでもあった。戦争はもはや支配階級間のゲームではなく、全国民の生活を巻き込むものになった。19世紀以降、各国政府は国民の戦闘意欲を引き出すため、過剰に外国への敵意をあおる場合も多くなった。後世これが大きな悲劇を生んだことを思えば、これはフランス革命の負の遺産とも言える。